水俣市立蘇峰記念館蔵の木製活字について

熊本県立大学文学部　**「蘇峰・蘆花プロジェクト」**

ここ数年、本学文学部では学部重点事業費の交付を大学より受け、徳富蘇峰、徳富蘆花研究の拠点化をめざし、様々な取り組みを行ってきました。そうした取り組みの一つとして、学生有志とともに水俣の旧淇水文庫の調査を進めてきました。

蘇峰が地域図書館としての淇水文庫設立に大きく貢献したことは、周知のことと思いますが、地域図書館としての機能が市立図書館の設立により新図書館へ移行し、淇水文庫の建物が蘇峰記念館へと衣替えされたことに伴い、かつて「文庫」にどのようなものがあったのか、あるいは文庫への蘇峰の関与はどのようなものであったのかということは、次第に記憶から薄れつつあることも、また事実です。

プロジェクトメンバーは、水俣市立図書館へ移管された旧淇水文庫図書の調査からはじめ、今では蘇峰記念館保管資料の全点調査へと手を伸ばしつつありますが、今回はそのような調査で得られた成果の一端をご報告したいと思います。

＊　＊

ここにご紹介ご報告するのは、江戸時代初頭に作られたとおぼしい木製の活字一組です。古典文学研究の世界では「古活字」と称されるものです。

具体的な紹介の前に、日本における印刷の歴史をごく簡単にまとめておきましょう。

日本における最古の印刷物は、八世紀に制作された百万塔陀羅尼といわれています。詳細は省きますが、鎮護国家のために諸寺院に奉納されたもので、現代の版画もしくは印鑑の要領により複数の刷りだしがなされたと考えられています。

ただしこれを書物とみなしてよいかには、異議もあろうかと思われます。事実、その後、三百年ほどは印刷の書物は現れた形跡がなく、十一世紀終わり近くになって、一部の寺院において仏書の印刷が行われるようになり、印刷された書物のたしかな登場となります。

このあと、鎌倉、室町時代を通じて主に寺院において、仏書を中心とした書物の刊行が見られますが、基本的には寺院の学問と結びついた内容の書物で、限られた圏域での流通を想定するものでした。これらは、技術的には中国の印刷術の影響を受けたもので、いわゆる二頁分の版面を一枚の板に彫り出し、それを木版画の要領で必要部数刷り、印刷された紙を綴じ合わせて製本するという

作り方でした。

さて、ここで日本における印刷技術上の大きな転機が訪れます。すなわち、「古活字」の登場です。時代としては、秀吉から家康の時代。そしてこの日本製のはじめての「活字」が登場する契機となったのは、宣教に訪れたキリシタンが布教活動のためにもたらした書物（これをキリシタン版と称します）、そして秀吉の朝鮮出兵に伴う略奪品としての書物（これを朝鮮版といいます）だったのです。いずれも活字印刷による出版物です。

これら海外の技術による活字印刷の書物が、当時の日本人に与えた衝撃がどの程度のものであったか、それはもはや想像にたよるしかないことですが、時の権力者や文化人の少なからぬ層の心を震わせたであろうことは、ほとんど時を置かずして自前の活字の制作にとりかかったことからも、容易に推測ができます。

この古活字印刷の書物、すなわち「古活字版」の研究に体系的に取り組んだ川瀬一馬氏は、その著『古活字版之研究』において、網羅的に古活字印刷の出版物を紹介しています。印刷対象となった書物の範囲は、国書（たとえば伊勢物語や太平記など）から、仏典、漢籍にわたり、その制作を指揮した者は、後陽成天皇、後水尾天皇、徳川家康、豊臣秀頼というように、天皇や武家、そして京洛の寺院も意欲を示し、さらには本阿弥光悦のような富裕な町衆にまで及んでいるのです。

数々の書物がこの古活字印刷という技術により公刊がなされたものの、元来が少部数の刊行を想定した出版であったため、現存する古活字本は貴重かつ高価なものとなっています。書物が本格的に商品として広く流通するようになるには、やはり一枚の版木に一丁（頁二面分）の本文や絵を彫り印刷する、かつての「整版」の技術に戻る必要があったのです。

＊　　＊

さて、古活字という書物印刷史上の技術のあらましと、文化史上の意義が、おぼろげながらにもご理解いただけたものと想定して、話を「活字」そのものに戻します。

古活字による印刷物（古活字本）は、現存する数は限られているとはいえ、複数の部数を印刷することが前提で生まれたものです。また先にも述べたように、多種多様な典籍がこの技術により刊行されましたので、古活字本を目にすることはさほど難しくはないでしょう。

しかし、活字そのものとなると話は別です。海外の技術に学んで生み出された、日本のこの「活字」印刷は、慶安年間を最後に一度幕を閉じてしまいます。使われなくなった活字は蔵の奥の片隅で眠りに入り、やがて忘れ去られ、火事などによりその多くは湮滅していったものと推測されます。いまだ蔵の奥で眠りから醒めるのを

待っている活字が、なおいくつか存在している可能性は高いのですが、現在、まとまった数の伝存が報告されているものは、以下のとおりです。

・印刷博物館蔵「駿河版銅活字」（文献8）
・東大寺図書館および東大寺本坊（文献1・7）
・上野寛永寺蔵「天海版一切経木活字」（文献5・10）
・伏見円光寺蔵「伏見版木活字」（文献3）
・延暦寺蔵「宗存版一切経木活字」（文献4・10）
・仁和寺「心蓮院版木活字」（文献6・9）
・高野山金剛峯寺（文献4）
・愛知県稲沢市性海寺（文献4）
・京都府八幡市正福寺（文献1）

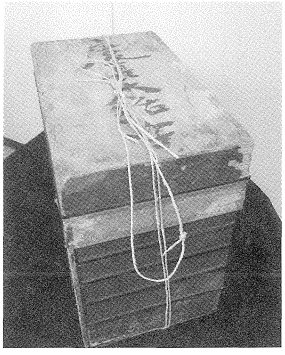
一見してわかるように、印刷博物館を除けばいずれも寺院蔵です。古活字制作への意欲が各階層にわたったと先に述べましたが、やはり制作の主流はいまだ寺院にあったと見るべきなのでしょう。そして、寺院という環境の特殊性が散逸や湮滅を防いで、現代に古活字を伝えることができたものと思われます。

さて、ここでようやく蘇峰記念館蔵の木活字にふれることになります。

現在の水俣市立蘇峰記念館は、かつては淇水文庫と呼ばれる地域図書館でした。その設立には、地元の名士であった徳富蘇峰も多大な貢献をしているのですが、水俣市立図書館が開設されるにともない、文庫の建物は蘇峰記念館として装いを新たにします。

その際、淇水文庫の蔵書のうち蘇峰からの寄贈本を中心に、新図書館へ移管されたのですが、特に蘇峰にかかわりの深い書籍や、写真などゆかりの品は蘇峰記念館に残されたようです。そして、ここに紹介する木活字も、蘇峰ゆかりの品として記念館に残された一品であったようです。

（図1）



木活字は、抽斗つきの木箱に収められ保管されていました。箱の最上段は蓋つき容器状になっており、写真をご覧いただくと判るように、「慶長木活字」と墨書されています（図1）。この蓋の裏側には特徴的な蘇峰の筆で、

是徳川初期木製活字
日本印刷史上可宝重
好資料也
昭和廿三十二月 頑蘇
八十六

と記されており、蘇峰の手を経た品であったことが知られます（図2）。

また容器状になった最上段部の底には、朱筆で次によ

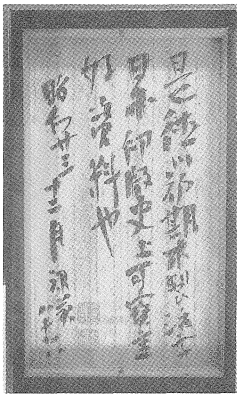
うに記されています（図3）。

静子老婦人記念トシテ
淇水文庫ニ寄進ス
昭和廿三
十二月 頑蘇八十六

夫人昭和二十三十一月七逝享年八十二

すなわち、永年連れ添った静子夫人の逝去を悼み、記念の品を淇水文庫に寄贈したとの由来が記されているのです。まさしく、蘇峰記念館が収蔵するにふさわしい、ゆかしき一品です。蘇峰が和漢洋の古典籍に強い愛着をいだく収集家であったことはよく知られていますが、同時にまた活字に対しても強い執着を示したことも、彼の忘れ難い一面です。そのことはまた、別に一文を草したいと思いますので、いまは紹介を続けましょう。

（図2）

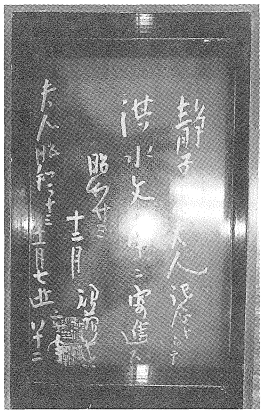


木箱の寸法は蓋の面から見て、縦三〇・四センチ、横一八・二センチ、高さ二八・〇センチ。抽斗は五段で、この内の四段に活字が収められています。厳密に数えてはいませんが、八百個以上はあります。いずれも漢字のようで、仮名文字活字は含まれていません。次なる興味は、これらがどこからもたらされたものなのか、何を印刷した活字なのか、というところに向かいます。

現時点においては、前者の問いに対する手掛かりを見いだしておりません。しばらく気長に探索を続けたいと思います。では、後者の問いはどうか。活字が印刷の版面を残したまま保存されていれば、何を印刷したものか、あるいは何を印刷しようとしていたのか、探究は容易でしょう。ところが、版面を崩した活字がランダムに収納された状態では、どのような典籍の印刷にもちいられたのか、残された漢字の種類だけで追究することは、通常であれば容易なことではありません。

念のため申し添えますと、ここに紹介する活字の保存状況からは、何らかの規則性（たとえば部首ごとにまとめる等）をもった配列で、抽斗に収納されているわけでもないようです。

（図3）



確かに漢字ばかりで仮名がないという条件からは、おそらく漢籍か仏典の印刷のためとの推測はつきますが、では当てもなく個々の活字の写真を、現存する漢籍等と突き合わせ、似たような活字がないか探すしかないのか。それもあまりに運だのみの作業です。

ところが幸いに、ここに得がたい手掛かりがあります。多くの場合、活字とは一文字ずつの単位で作成されますが、当時の古活字においては、少数ですが、数文字をまとめて活字とする連続活字を作ることがあります。蘇峰記念館蔵の古活字の中にも、二例、連続活字の存在が確認できます。そのうちの一つ「皐陶謨第四」とひと続きで彫られた活字、この活字の存在から、印刷対象となっていた典籍とは経書のひとつ、『尚書』であることが判明します。「皐陶謨」とは『尚書』の篇名のひとつだからです。しかも、「第四」というところまで続けて彫られているので、これは篇のタイトルとして彫られた活字であることは明らかです（図4）。

（図4）

（図5）

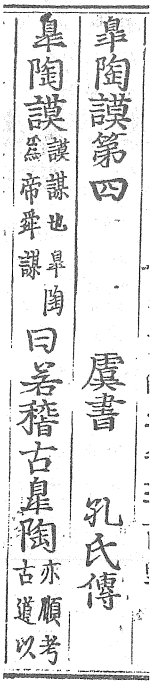
＊　＊

さて、そうなると古活字版の『尚書』の有無が問題になってきます。そこで、まずは川瀬氏の大著を繰ることになります。すると、そこには五種の古活字版の存在が報告されていました。このうちの四種は、本文の句の切れ目ごとに割り注の入った有註本、残る一種は割り注をもたない無註本です。

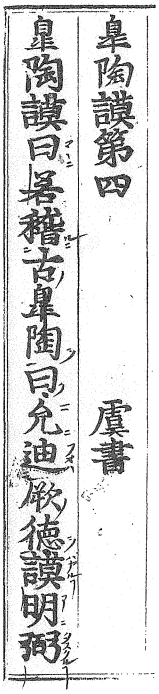
デジタル画像の公開の進んだ現代においては、何点かはたちどころにパソコン上で印字面を確認できます。この方法で確認したのが、国立国会図書館蔵本と京都大学の蔵本とですが、いずれも川瀬氏『古活字版之研究』の分類になる第一種の有註本です。同書においては「帝国図書館」「谷村一太郎」所蔵として著録されるものです。ここでは国立国会図書館ウェブサイトから転載した画像を掲げておきます（図5）。この画像と付き合わせてみると、活字の書体の雰囲気には双方あい近いものが感じられますが、子細に見比べれば蘇峰記念館蔵の活字との不一致は明瞭です。

さてこうなると、次には残る三種の有註本と無註本の『尚書』について、それぞれの収蔵館に閲覧をお願いしながら活字との一致不一致を確認するしかありません。まずは名古屋市蓬左文庫を訪ねました。ここで、有註本の第二種と無註本の確認ができました。図の6と7です。これも一致しません。

（図6）



（図 7）



次に足を運んだのは、石川武美記念図書館、旧称「お茶の水図書館」です。ここには蘇峰のかつてのコレクションであった「成簣堂文庫」が収められています。この文庫に、有註本第一種と有註本第三種の古活字版『尚書』があります。第一種本はすでに確認済みですが、念を入れて閲覧をお願いしました。初見となるこの第三種本には、ひそかな期待が伴っていました。もし、ここで活字が一致するのであれば、まさしく蘇峰収集の古活字本により、記念館蔵の古活字の素性が明らかとなるのですし、もしかすると、両者が時を同じくして蘇峰の手中にあった時期があるかもしれないのですから。

夢想はさらに広がります。愛書家で活字好きの蘇峰であれば、両者の関係にも当然気づいていたはず。活字と本とを両手にして、満悦の時を過ごしていた蘇峰、…眼に見えるようです。そんな報告ができることを期待していたのです。

しかし、現実はさようにドラマチックではありません。またも不一致を確認せざると得ない結果となりました。

そうなると残るのは、第四種本のみとなります。今回は時間の制約から、成城大学の山田尚子氏に調査をお願いしました。第四種本も国会図書館ほかに収蔵が知られていますが、東洋文庫蔵本により調査をして下さいました。簡略に結論を述べます。不一致でした。つまり、現存する印刷物としての古活字版『尚書』には、蘇峰記念館の活字に一致するものがないということになります。

＊　＊

後掲の参考文献からうかがえるように、古活字版ならぬ古活字それ自体の研究は、西暦二〇〇〇年前後に、急速に進展してきました。文化財保護の観点から、木質分析など領域横断的な形での研究も要請されるようになっている状況も窺われます。また、近世初期の活字出版文化の拠点でもあった、伏見円光寺、比叡山延暦寺、上野寛永寺といった、一万を超える活字を擁する寺院の調査がすすめられたことで、一部の活字について、後代の補刻がなされていたことなど、新しい情報も加わるようになりました。

何より、これら大寺院の活字調査は、その寺院からかつて刊行された活字版書物との関係を現存する活字と照合することで、活字の用途と素性が生き生きと蘇るさまを浮かび上がらせました。蘇峰記念館の活字についても、「慶長」期とまでは断言せずとも、それに近い時期に制作、使用されたものであることを、今に伝存する古活字版『尚

書』により示し得ないか、との調査だったわけですが、立証には至りませんでした。しかし、逆に、未発見の古活字版『尚書』の存在を示唆するものとも考えられます。他の活字とあわせ、なお探索を続けたいと思います。

参考文献

1 齋藤彦松「東大寺に現存する古活字の研究」（『南都仏教』第四号、一九五七年）
2 川瀬一馬『古活字版之研究（増補）』（ABAJ、一九六七年）
3 『円光寺の文化財』（瑞巌山圓光寺、一九九一年）
4 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課『延暦寺木活字関係資料調査報告書』（滋賀県教育委員会、二〇〇〇年）
5 渡邉守邦編『寛永寺蔵天海版木活字を中心とした出版文化財の調査・分類・保存に関する研究』（科学研究費研究成果報告書、二〇〇二年）
6 村上明子「古活字版成立に関する総合的研究 ―仁和寺所蔵古活字を中心にして―」（科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇九年）
7 橋口侯之介「和本の世界①和本で見る日本人の書物観」（明治大学リバティーアカデミー、二〇一一年）（file:///D:/研究/pdf論文/古活字/meiji_110701.pdf 二〇一八年十月五日取得）
8 図録『武士と印刷』（印刷博物館、二〇一六年）
9 村上明子「古活字版伝播に関する研究 ―仁和寺所蔵古活字のデジタル画像分析を基盤にして―」（科学研究費助成事業研究成果報告書、二〇一七）
10 水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七年）

【付記】

水俣市立蘇峰記念館蔵古活字の写真掲載にあたっては、水俣市教育委員会から御許可（水教生指令第65号）を、また名古屋市蓬左文庫蔵の古活字版『尚書』二種の写真掲載にあたっては、名古屋市教育委員会からの御許可をいただきました（30指令教蓬第1―73号）。公開のデジタル画像を利用させていただいた国立国会図書館とあわせ、ここに記し御礼を申し上げます。